

# アルバニア共和国およびドイツ語圏における アルバニア語の使用状況

井 浦 伊知郎

筆者は、1995年10月から1996年7月までミュンヘン大学のInstitut für allgemeine und indogermanische Sprachwissenschaftで、Wilfried Fiedler, Ardian Klosi 氏らによるバルカン言語学・アルバニア語学の演習・講義に出席した。また留学中の休暇を利用し、1996年4月後半にアルバニア共和国を訪れた。同国への渡航は1995年2月以来二度目だが、首都ティラナの景観は一年前と比べ格段に向上していた。前回は科学アカデミー付属の言語学研究所でSeit Mansaku (アルバニア語史), Enver Hysa (語彙論), Xhevat Lloshi (文体論)ら言語学者と話すことができたが、今回はIsmail Kadare や Xhevahir Spahiu といった作家・詩人に(大部分偶然だが)会うこともできた。

本稿ではアルバニア語をめぐる諸事情について、筆者の見聞をもとに紹介する。

## 1. アルバニア共和国

アルバニア語の方言は南部のトスクと北部のゲグに大別される。現在の標準書き言葉にはトスクの影響が強いが、アルバニアの北半分やモンテネグロ、コソヴォではゲグが日常語として用いられている。標準語の語形に続いて、ゲグ方言の特徴をいくつか挙げる。

鼻音の存在 bën「する、行なう」, këngë「歌」 / bân, kângë

長母音の存在 ka「持つ」, gur「石」 / kaa, guur (更に地域差あり)

「ロタシズム」 Shqipëri「アルバニア」, hyri「入る (aorist)」 / Shqipni, hyni  
分詞語尾 (ゲグはより古形に近い) shkoj > shkuar「行く」 / shkuem (shkuom)

二重母音の変化、消失 mua「私を、私に」 / mue (muo), mu

不定詞の残存 (標準語にはない) shkoj > me shkue

“habere”+Inf. = Fut. do të shkoj「私は行くだろう」 / kam më shkue

Gerundivの多用 duke shkuar / tue shkue

Po shkoj. / Jam tue shkue. 「(今) 行くところだ」

(標準語でJam duke shkuarは不自然)

ゲグ使用圏には、標準語を受け入れながらも純粋なゲグ方言の要素を含んだ書き言葉としてのゲグ方言が存在する。この「規範化されたゲグ」は北部アルバニア人（カトリック）が読む聖書訳にも用いられ、既に北部作家の出版作品にも現れているが、最近まで（特にアルバニア本国で正書法が制定された70年代以降）正統派の方言研究の陰に隠れていた。まとまった研究は事実上始まったばかりの段階にある。

ヨーロッパ比較言語学におけるアルバニア語の重要性は研究者の間で十分に意識されていると言える。Eqrem Çabej, Shaban Demiraj らアルバニア人学者の歴史的研究はドイツ・イタリアで高く評価されている。ティラナの言語学研究所からは三種類のアルバニア語学雑誌（うち一誌は外国語のみ）が刊行されている。外国からのアルバニア語学習者の受け入れにも熱心である。労働党一党体制時代から科学アカデミーとティラナ大学の全面支援で行われてきた夏期講習は健在で、1996年はアルバニア語とアルバニア文学の学術セミナーも同時開催された。ただし、筆者は今回残念ながら参加できなかった。

アルバニア語による出版事情はまさに「百家争鳴」状態で、出版社は個人経営のものも含めて数百社に急増し、北部作家の作品が本来のゲグ方言の形で再刊されたりもしている。ちなみに南部のギリシア系住民のためにギリシア語の新聞が出ているはずなのだが、ティラナの街角では見つからなかった（一方、代表的なアルバニア語紙には必ずドラクマでの価格が併記されている。ギリシアでの販売を意識しているのであろう）。またアロムニア（アルーマニア）語などの話者もごく僅かに存在し、政治団体も結成されている様だが、出版にまで手を出しているという話は聞かない。

## 2. ドイツ語圏

一方、ドイツ、スイス、オーストリアに居住するアルバニア人は、2万人程度と推定されるが、正確な数を出すことは難しい。この不明瞭さは、いわゆる不法滞在者の存在のみによるものではない。クロアチアやセルビア（ユーゴスラヴィア）やマケドニアの国籍を持ち、それらの国の旅券で滞在許可を得るアルバニア人が、相当数存在するからである。

ドイツ語圏に住むアルバニア人の大部分は、セルビア共和国内にあるコソヴォ自治州からの就労者である。一方アルバニア共和国からの場合は、大学などへの留学を目的としていることが多い。また家族ぐるみで長期間滞在している場合、その子供はドイツ人と同じ教育環境で学び、母語とほぼ同程度にドイツ語を運用することができる。

私が出席した授業では、三十人前後の受講者の中で半数以上がアルバニア人だった。こうした人々は二つに分けられる。一方は、学術的に母語を研究しようとする言語学専攻の学生であり、他方は、ミュンヘンで行われるドイツ語－アルバニア語通訳の国家試験に合格するために受講している人々である。日本人にとっての日本語教師養成講座などを考えれば分かり易いが、彼らの母語に対する文法知識は正確でない場合が多い。しかも各人の日常語は、出身地毎の方言の影響を強く受けている。正確な標準アルバニア語（と正確な

ドイツ語)で通訳をこなすための補習機関として、大学が活用されているのである。

ドイツ語圏の中で、スイス・チューリヒは在外アルバニア人の最大拠点であり、中央駅周辺にアルバニア人向けの出版社や旅行会社などが数多くある。ドイツ連邦共和国内では、シュトゥットガルトがアルバニア人の多く住む都市として知られている。ミュンヘンの場合、アルバニア人が集中して居住する様な地域はないが、郊外にコソヴォ・アルバニア人中心の文化センターがあり、民謡演奏会などを定期的に行なっている。

在外アルバニア人達の母語使用は、当然ながら家庭や同郷者との会話に限られており、どれほど長期間滞在しようと、ドイツ人社会に向けてアルバニア語を使おうとすることはない。従って、彼らのアルバニア語にドイツ語の影響による変化が生じることもない。ただ、上述した様に方言の差異が小さくないので、例えば、アルバニア北部やコソヴォの出身者がティラナ出身者と会話する場合、ゲグ方言を若干修正して標準語に近付けるという可能性は充分あるだろう（これを『規範化されたゲグ』と呼べるかどうかは定かでない）。もっとも在外アルバニア人の多数派はゲグ使用圏の出身なので、こうした標準語との差異よりも、同じゲグ方言内での細かな相違点をアルバニア人達自身が発見し驚く、という場面の方が多い様だ。筆者も大学内で数回目撃したことだが、プリシュティナ（コソヴォの中心都市）出身の学生がコソヴォ南部出身の学生と話していた時、衣類や料理名、果ては動詞にまで「一度も聞いたことがない」という単語の頻発に、哑然としていた。それがまた授業時の話題になることは言うまでもない。

ここで活字媒体に目を向けてみよう。大都市の中央駅には必ず外国語新聞・雑誌の販売店があり、ミュンヘンも例外ではない。ここに足を運べば、アルバニア語で書かれた新聞や雑誌をいつでも手に入れることができる。勿論ドイツ国内での定期購読も可能である。

ただし、アルバニア共和国で刊行されたものは全く置かれていない。こうしたことは、ドイツ語圏で売られている外国語紙誌にしばしば見られることである。例えば、ドイツで買えるトルコ語新聞の多くはトルコ本国からのものでなく、ドイツ語圏内の出版社から在住トルコ人向けに発行されている。事情はアルバニア語紙誌についても同様であり、各紙誌の出版元は大抵シュトゥットガルトかチューリヒである。例外は「コソヴォ共和国」独立を求めるコソヴォ民主連盟（LDK）の機関紙「Rilindja（再生）」で、ティラナの街頭でもミュンヘン駅でも買うことができる。ちなみに他のバルカン諸語について調べてみると、ギリシア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語、ルーマニア語の新聞・雑誌が常備されており、売られていないのはブルガリア語の出版物だけであった。

テレビ・ラジオに関しては、トルコ語メディアほどの普及は見られない（ドイツにはトルコ語のケーブルチャンネルがある）。ただ、ミュンヘンの地元FM局であるRadio Loraでは毎週30分ずつ、ペルシア語やクロアチア語による放送時間を設けており、アルバニア語のニュースや音楽番組が水曜日の夜に放送されている。また短波でRadio Tiranaを受信することも充分可能である。